



恵那石 ロングインタビュー

ビュー

— ただ在ることの先に見えたもの —

インタビュアー（以下 イ）：初めまして。今日はよろしくお願ひします。あなたにインタビューできるのを楽しみにしてきました。

恵那石（以下 恵）：自分なんかでいいのでしょうか。ここにはもっと注目されるべき存在が沢山いると思うのですが。

イ：と言われますと例えば？

恵：例えばですか。コレクションはいうまでも無いですよ。自分たちの立場のようなものなら、外壁を守っているタイル。彼らはこの美術館の為に特別に焼かれたものたちです。

イ：確かにその話は伺っています。私としてはこの美術館に立ち入ろうとするとき必ず最初に会えるあなたに興味がありました。今は西門と名を変えたかつての正門でも、そして昨年のリニューアルによって新しい顔となった南側の門（※1）においても、まずあなた方が出迎えてくださいます。

恵：それが仕事ですから。笑

イ：それと開館当時の姿を古い建築専門誌の中から見つけたのですが、当時の写真はあなたたちがかなり重要な役割を此処で果たしていることをとても明確にとらえていました。

恵：というと？

イ：池に沿うように敷かれているのも恵那石さん、あなたのお仲間ですよ。園内の空間を仕切るように存在する石壁もあなたたちです。岐阜県美術館は開館にあたり「みどりの連帯～美とふれ合い、美と対話する～」という大きなテーマを据えています。その実現においてあなたたちの存在は、大きかったように私には思えました。

恵：自分たちはただ連れてこられて、積まれただけですからね。でも設計された方の思いの具現化に一役買ったのなら、此処まで来た甲斐もあるというものです。

イ：ご自身は自分たちの存在が、緑と建物の中和を担っているという認識はありませんか。

恵：中和をする存在ですか？自分たちは建築資材でしかありませんからね。正直大層な役割を与えられて此処にいる気は余りありません。とはいえ、誤解しないでくださいよ。資材としての仕事はしっかり果たす気で今も此処に居ることは確かです。

イ：もちろんです。ではご自身では此処での役割はなんだと？

恵：石垣の仕事はもちろん外部からの侵入を防ぐということもあります。ですが、此処、岐阜県美術館においては生垣の土止めの役割の方が大きいかなあと思っています。あとは空間演出ですかね。

イ：確かに外囲いとなる部分は比較的低めに積まれている印象はありますね。

恵：ええ、ここではなるべく圧迫感が出ない様に自分たちは積まれているのだと思います。視界を遮らないというか、世界を遮らないというか。

イ：世界を遮らない？

恵：開館にあたっては「開かれた美術館」という理念も大切にされたと聞きます。それを境界線においても具現化したということではないでしょうか。

イ：先ほど話題にあげたテーマに沿って、緑を愛でやすいよう視線を塞がないという意味で低層にされているのかなという程度の理解しか私はしていませんでした。なるほど。

恵：いや、自分には難しいことはわかりませんよ。ただ、もし自分がいる場所が例えばコンクリートの高い壁であったり、味気ないブロックの塀だったりしたらということイメージした時、どうでしょう、少しばかり圧迫感や閉塞感があるような気もするんですね。

イ：個人的にはあなた方の色味が重要な気がします。庭の「緑」と建物などの「白」、それをあなたの風合いが上手く調和させているというか。そこが先ほど私が指摘したかった部分でもあります。

恵：おそらくあなたがお覧になったであろう写真など、開館当初はもっと、黄味そして白味が強かったかと思います。

イ：その通りです、白みが強いという部分はとても特徴的に感じました。石なのに軽やかというか、土の色とはまた違った地表感といいましょうか。

恵：この茶褐色な部分がいわゆる「サビ」と呼ばれる所以です。今回「恵那石」という呼称でここに登場させていただいていますが、「恵那錆（サビ）石」という呼びの方がピンと来る方は多いかもしれません。

イ：そこは私たちも選択に迷いました。どうお呼びすることが正解なのか。正直答えが出し切れないまま今日を迎えました。

恵：それはこちらこそ申し訳なかった。乱暴な言い方かもしれませんが、自分たちは所詮「石材」です。ですから呼称や名称は色々あって当然なんです。

イ：「花崗岩」のお仲間でもよろしいんですね？

恵：そうです。黄色い御影石と説明されることもありますね。採石された地域や扱う業者の呼び方次第というところもあります。恵那みかげ、蛭川みかげ。岐阜さび、美濃さび、木曾石と。どれも結局、自分を指す呼称です。

イ：私も僅かではありますが調べさせてもらいました。あなた方について紹介されているサイトなどには、先ほどお話くださった色の特徴をはじめ、「岩石が生成され、凝固する時に収縮シラックが発生します。そこへ高圧のマグマから発する熱水が浸透する事で、最初に緑閃石成分が侵入し皮膜が作られます。それにより鉄分などの進入が妨げられるために、白と錆の強いコントラストが生まれる（という事が解明されつつあります）」（※2）との解説などがありました。しかし、これらの説明を受けても、似たような風合いの石と出くわした時、あなたかどうかな正しく答えられる自信はありません。分かりやすい見分け方はありますか？

恵：どうでしょう。自分は恵那の蛭川からやってきたんですが、そこらで採掘される石は比較的多くのラジウムを含むそうです。でもみなさんが普通ご覧になるとき、わざわざ成分測定などなさらないでしょうしね。

イ：残念ながら、その方法はなかなか容易なことではないですね。天然石であるあなた方は濃淡やラインなど、実は見た目にもかなり個性をお持ちです。

恵：磨かれたものとそうでないものでもまた石は表情を変えますからね。また外見は同じように見えても成分的な「岩」のレベルで、実は分類が異なっているなんてものもざらにありますよ。

イ：うかつにあなた方のお名前を呼ぶのが怖くもなります。

恵：とはいえです。自分たちとしては名前なんてものがつけられたのはせいぜいここ1千年にも満たない時代の話です。唯、在る。自分たちはそれ以上でもそれ以下でも無いと思っています。

イ：なるほど。理解しようとする上でなんとか名前を求めようとするのは、人間のエゴでしたね。すみません。

恵：でもその人間のおかげで、私はここに来られた。山の中でじっと時を重ね終えるより、私はここに来て本当にラッキーだったと感じています。

イ：例えばどんなところですか？

恵：此処に居る木々たちのじつに8割は、日本各地から集められたものです。まして美術館には日本全国、もっといえば世界各国からの来館者が訪れます。私は此処にいて そんな彼らのくつろぐ表情を眺めたり、おしゃべりを耳をそばだてて聞いたりしている。これは山の中にいたままでは、できなかった体験です。

イ：でも切り出されなければ、風に晒され劣化することもなかった。

恵：それはタラレバの話です。最近のこんな気候じゃ自然界だって安心して住んでられないものだと自分は思いますよ。

イ：確かに 笑。

恵：石だって永遠ではない。自分たちとあなたたちとは もともと時の単位が違うでしょうが、それでもいつか終焉の時は来る。

イ：以前、もうすぐ寿命を迎えようとしている星の観測データを音としてアートにした作品に出会ったことがあります。郷愁感というか不思議な気持ちにさせられたのを記憶しています。

恵：ええ私も数年前、金沢からの旅人の会話から、その話をこぼれ聞きました。声なきものの声が届く、いい時代になったと思いました。

イ：あなたのそういう捉え方は、私にとってもとても新鮮な気がします。ここ最近の印象深いエピソードなどがあればお聞かせ願えませんか？

恵：では一昨日目撃したとおきのを。ここからステージの方を眺めていると、少々強面の年齢60前後の男性が、ずっとスマホをいじってらしたんですよ。するとそこに小さな子が走り寄って行って何やら話を始めたんです。男性も膝を折り、視線を合わせて楽しそうにしているので、すっかりお孫さんかと思っていたんですが。後から若い女性がやって来て、平謝りをしてその子を連れて帰っていったんです。

イ：察するに、全くその方とは関係のないお子さんだったのですね？

恵：ええ、母親の恐縮至極の態度からは、そのように見受けられました。でもその子と話してる時の男性の笑顔がなんとも柔らかくて。その後もこころなしか口元がずっと緩んでらしたような気がしましたね。

イ：子どもは本質で人を見ますものね。そして人を幸せにする。

恵：我々もかくありたいと思いますね。

イ：何万年も生きてこられたあなたでもそんな風を感じたりなさるんですね。

恵：・・・少々人間の世界に近付き過ぎたのかもしれませんが。

イ：来館者へのメッセージなどがあれば是非。

恵：芸術を鑑賞しに来るなんて思うと二の足を踏まれる方もいるかもしれませんが、陽気の良い日は日向ぼっこに、気分の冴えない日はリフレッシュに、もっとこの空間を活用してほしいと自分なんかは思ったりします。素敵ですよ、ここの庭園。

イ：ええ、私も本当にそう思います。

恵：開館当時は綺麗にデザインされているとはいえ、木々がまだ幼く、少々心許ない風景だったかもしれません。何でも育つのを待つことは忍耐力がいることです。でも此処を設計なさった方はちゃんと時の流れを信じたわけです。そして彼らがかたどるこの庭園は現在、紛れもなく街に憩いをもたらす緑として、この岐阜県美術館という空間を確立してきていると思います。

イ：まだまだ進化すると？

恵：ええ、緑は生きものですから。街も生きもの。そしてここに足を運んでくださる皆さんだって、生きもの。日々変化を遂げますよね。

イ：美術館も生きもの、ということですね。そしてあなた自身も。

恵：もちろん、そうですね。

イ：最後にもしよろしければ もう一つ。あなたが美術館に期待することはありますか？

恵：（暫く考え込んだ後）石畳さんたちにちょっとブラシをかけてあげてほしいかなあ。
あとは、空間としてのこの美術館をもっと活かしてほしいという思いは陰ながらありますね。行政というものの難しさは自分には分かり得ぬものですが。せつかくですからね、もっと多くの人たちがこの庭で、この美術館で、自由に楽しそうにしている姿を眺めたいなあとは自分は思います。

イ：ええ、私も石垣のあなたの上に腰掛けながら そんな風景を眺めたいです。
本日はどうも ありがとうございます。

恵：こちらこそ。

2020・10 談

※（1） 2019年より、図書館側にある南側の門が正門となりました。

※（2） 参考資料 岐阜県花崗岩販売協同組合 <http://www.hirukawa-ishi.com>

その他 詳しくお知りになりたい方にオススメ

中津川市鉱物博物館ホームページ内 webミュージアム <http://mineral.n-muse.jp>

岐阜県美術館の、かなり細かな部分や、
地味だけど素敵なところを掘り下げます。
今回は「実はすごい県美の窓」をお送り
する予定です。

県美鏡 其の1
「恵那石ロングインタビュー」
おわり 文責 県美帖丸

